

ツバキキンカクチャワಂತケ *Ciborinia camelliae* L.M. Kohn

子のう菌門 *Ascomycota* チャワಂತケ亜門 *Pezizomycotina* ズキンタケ綱 *Leotiomyces* ビョウタケ目 *Helotiales*
キンカクキン科 *Sclerotiniaceae* ニセキンカクキン属 *Ciborinia*

供試標本

茅野市八ヶ岳総合博物館標本菌類 F-00001, 2015年4月12日, 諏訪郡富士見町落合蔦木(敬冠院), 市川浩久採集;
F-00093, 2016年3月20日, 同所, 市川浩久採集; F-00237, 2017年4月20日, 同所, 市川浩久採集; F-00440, 2018年4月21日, 同所, 中島年雄採集; F-00620, 2019年4月20日, 同所, 遠山俊祐採集.

肉眼的特徴 (Fig. A)

菌核は、地上に落下して老朽萎縮したツバキの花弁に付着して生じ、楕円形あるいは不定形、黒褐色。子のう果は春に1個の菌核より1-2個生じ、通常長い柄を有する。子囊盤は幼菌時はろうと状で、のちに扁平から歪んだ皿状に開くが中央部が凹むものもあり、子のう盤の径7-18 mm、汚褐色で吸水性があり、乾くとクリーム色、外面は淡褐色の粉状となる。柄は長さ24-75mmで細長く曲がり、径1-2 mm、子のう盤とほぼ同色。

顕微鏡的特徴

熱乾燥標本を用いた。子嚢胞子の観察には切片を3% KOHで封入し、それ以外は3% KOHにコンゴーレッドを追加したものに封入し、プレパラートを作成して観察した。

托外被層は幅10.4-23.0 μm 、平均 \bar{x} =16.0 μm (2標本、n=20)、やや丸みを帯びた多角菌組織からなり、ほぼ無色。表面からは短い円柱状の細胞が立ち上がる(Fig. C)。托髄層は幅5.6-13.2 μm 、平均 \bar{x} =8.6 μm (2標本、n=20)、無色、薄壁の絡み合い菌組織からなる(Fig. D)。子実下層は淡褐色。側糸は糸状、幅1.3-3.2 μm 、先端はわずかに膨らみ最大3.6 μm 、平均 \bar{x} =2.5 μm (5標本、n=20)、隔壁があり下部で分岐する(Fig. E)。子のうは104.5-125.2 \times 6.5-8.0 μm (3標本、n=20)、円筒状からやや棍棒形で薄壁、無弁で頂孔はアミロイド、8孢子性(Fig. F)。子のう胞子は(8.0-8.9-11.8(-14.9) \times (3.7-4.3-5.5(-6.6) μm 、縦横比=1.96-2.30、縦横比平均 \bar{x} =2.13(5標本、n=100)、長楕円形から卵形、無色で平滑、両端近くに少数の油球状の内容物がある(Fig. G)。

生態的特徴

供試標本は標高720mのヤブツバキ林内で散生(Fig. B)。発生時期は4月が中心だが3月下旬にも採集されている。

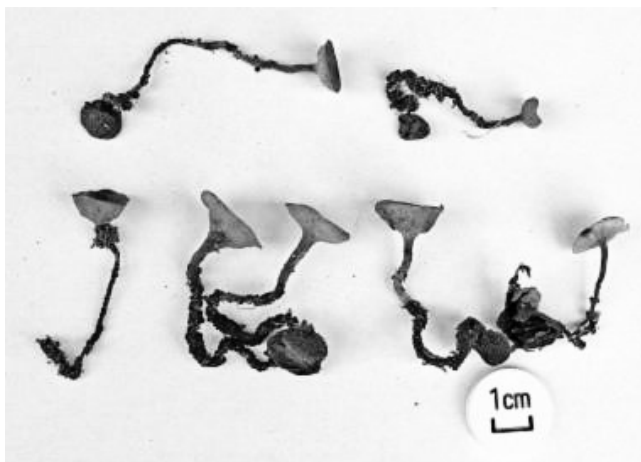
ノート

文献1, 2では子のうの大きさが120-145 \times 6-8 μm と本標本に比べて長い、その他の特徴は概ね一致する。文献3ではツバキノミチャワಂತケとして記載されている。子のうの大きさが140-180 \times 10-12 μm 、胞子の大きさが12-13 \times 6-8 μm と本標本より大きくやや疑問が残るが、その他は概ね一致する。

- 文献 1 今関六也 本郷次雄 (1989) 原色日本新菌類図鑑(II), p 254, 保育社
2 池田良幸 (2013) 新版北陸のきのこ図鑑, p 284, 橋本確文堂
3 青木実 (2008) 日本きのこ図版第6巻, p 157, 日本きのこ同好会2

担当 市川浩久

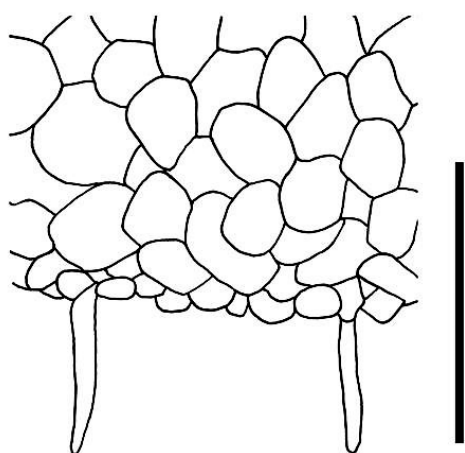
監修 慶応義塾大学准教授 糟谷大河



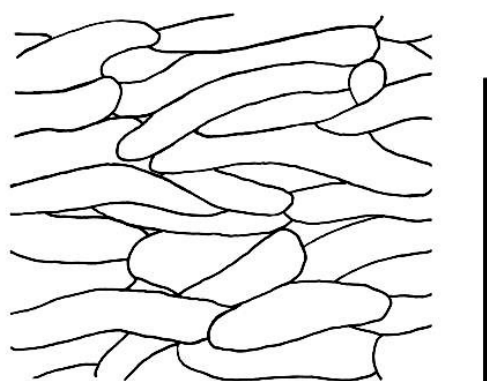
A 子のう果



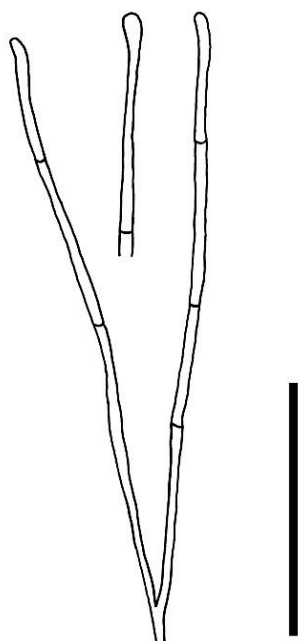
B 野外での発生状況



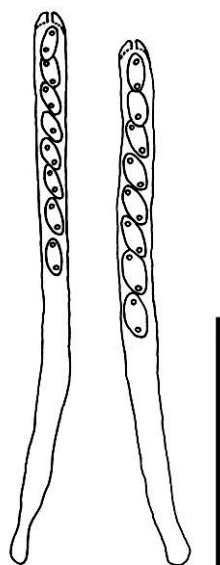
C 托外被層



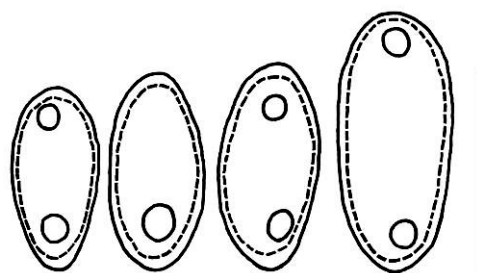
D 托髓層



E 側糸



F 子のう



G 子のう胞子

スケールバー : C, D, E, F 50 μ m ; G 10 μ m